グロスター公リチャードの宮廷革命

石　原　孝　哉

I

1483年4月29日、グロスター公リチャードとバッキンガム公は、新国王の戴冠式のためにロンドンに向かう途上、ノーザンプトンで、プリンス・オヴ・ウエールズの居城ラドロウ城から上洛する国王を護衛してきたリヴァース伯アンソニイ・ウッドヴィルの出迎えを受ける。3人は夕食をともにしながら何事もなかったのかの如く談笑し、ここでリヴァース伯は、両公爵に対して諮問会議の経過を報告したと思われる。その報告を聞けば、二人は諮問会議がいかにウッドヴィル一族に支配され、国王とは名ばかりの幼いエドワード五世を名代にして、事実上皇太后エリザベスとその一族が全権を握っている様子が理解できたであろう。もちろん諮問会議の成り行きは、すでにヘイスティングズ卿を通じてリチャードには知らされていたが、ここで改めてリヴァース伯の口から「グロスター公の中央政界復帰無用論」(1) が伝えられると、リチャードとバッキンガム公は「現状を追認するか、それとも宮廷革命を起こしてウッドヴィル一族から実権を奪取するか」の二者択一を迫られたのである。

このような深刻な対立を内に秘めつつも会食は和やかな雰囲気のうちに終え、その夜はそれぞれの宿舎に引き揚げた。しかし、そのあとで、リチャードとバッキンガム公が密かに会合し、密談したことは各年代記が一致して推測するところである。その会談では、両公爵が、ロンドンにいるヘイスティングズ卿と呼応して宮廷革命により実権を握る決断をしたものと思われる。

明けて4月30日、リチャードとバッキンガム公は行動を開始する。マンチーニを見てみよう。

At dawn on the following day, when everything was prepared for the journey, Richard, after secretly giving curt orders to this effect, seized Rivers and his companions and imprisoned them in that place. Then with a large body of soldiers, and in company with the duke of Buckingham, he hastened at full gallop towards the young king. (2)

ここで見る限り、次の日の早暁、出立の支度がすべて整った段階で、リチャードはリヴァース伯一行を逮捕し、この地の牢に彼らを収監して、ストーニィ・ストラットフォードの国王のもとに急いだということがわかる。この見解は多くの歴史家に支持され、一般的にはリヴァース伯等は宿で寝込みを襲われたとされている。(3) しかし、同じ事件を扱った『続クローランド年代記』は多少違った記述をしている。

When morning came, and a wretched one as it afterwards appeared, after a plan had been made during the night, all the lords set out together to present themselves to the new king at Stony Stratford, a place a few miles from Northampton. Behold!

When those two dukes had nearly reached the entrance to this place they arrested Earl Rivers and his nephew, Richard, the king's [uterine] brother and certain others who came with them and ordered them to be taken to the North in captivity. (4)

ここでは、リチャード、バッキンガム公、リヴァース伯など全員がそろってノーザンプトンから数マイル先のストーニィ・ストラットフォードに向かったが、「この地の入り口にさしかかろうとしたとき、二人の公爵はリヴァース伯と、その甥で、国王の異父兄（リチャード・グレイ）、それに随行の者たちを逮捕して、北部に監禁するように命じた」となっている。つまり、リヴァース伯等の逮捕がノーザンプトンではなくストーニィ・ストラットフォードであり、収監の場所もノーザンプトンではなく北部となっている。『続クローランド年代記』ではこれに続く文章の中で、二人の公爵が、リヴァース伯の逮捕のことなど知らな

い国王の身柄を拘束し、その側近を逮捕したこと。その中には老齢の侍従長トマス・ヴォーガンもいたこと。このときリチャードは、国王に対して臣下がとるべき十分な敬意、つまり帽子を取り、ひざを曲げて挨拶するなど敬意を払わなかったこと。そして国王の側近の中にリチャードの名誉を汚し、彼の命を狙うものがいるとして、家臣たちの退去を命じたこと等が手短に記されている。(5)

ストーニィ・ストラットフォードにおける事件の経緯について、マンチーニの記述は『続クローランド年代記』とはかなり違ったところもあり、さらに詳しいいきさつが描写されている。以下、マンチーニの記述に沿って当日の事件をたどってみる。

リチャードは、リヴァース伯等をノーザンプトンで逮捕して彼らをそこに監禁し、道路にリチャードとバッキンガム公の家来を見張りに立ててこの情報が国王側に漏れないようにしたうえで、多くの部下とバッキンガム公を伴って全速力で、ストーニィ・ストラットフォードに向かって馬を走らせた。(6)

ストーニィ・ストラットフォードに入ったリチャードとバッキンガム公は、すばやく国王の兵士を逮捕すると、臣下として国王に礼を取って挨拶し、まず先王の死を悼んだ。『続クローランド年代記』では、リチャードが臣下としての礼を取らなかったことが非難されているが、マンチーニでは「リチャードとバッキンガム公は沈痛な面持ちで、国王の父の死に深い哀悼の意を表した」(7)となっている。これに続く文章で、両公爵がなぜ宮廷革命を起こしたかの理由が説明されている。すなわち、両公爵は、先王エドワード四世が死んだのは国王の健康などにほとんど気を配らなかった側近たちのせいであるとして、その家臣を糾弾した。先王は身持ちが悪かったが、家臣たちも一緒になってその悪徳に手を染めたために、放蕩生活が健康を蝕む原因になった。よって、先王の死は家臣たちに責任がある。このような不幸を二度と辿らぬために、先王の家臣はすべて現国王の身の回りから退くべきだ、と二人の公爵は主張した。また、彼等はリチャードを殺害しようと陰謀を巡らしたり、ロンドンや路上で待ち伏せしようとしたことが、仲間からの通報で明らかになった、とも主張した。これに対して国王は、少年ながら聡明さを発揮して、毅然たる反駁をしている。

The youth, possessing the likeness of his father's noble spirit besides talent and remarkable learning, replied to this saying that he merely had those ministers whom his father had given him; and relying on his father's prudence, he believed that good and faithful ones had been given him. He had seen nothing evil in them and wished to keep them unless otherwise proved to be evil. (8)

若い王は、「父が与えてくれた家臣をそのまま用いているだけである」、「自分は先王の思慮分別を信頼しているし、善良、忠実な家臣が与えられたと信じている」、「彼らの悪事をみたことがなく、その悪事が証明されない限り、彼らを身の回りに置いておきたい」と筋道を立てて反論している。このような見事な対応をマンチーニは「父親譲りの高貴な精神」、「才能、目を見張る学識」と褒めそやしているのであるが、王国の統治に関して、「自分は貴族や皇太后を全面的に信頼しており、前の大臣らに何の問題もない」(9) とうっかり母親を引き合いに出してしまった。そこをバッキンガム公に突かれることになる。

On hearing the queen's name the duke of Buckingham, who loathed her race, then answered, it was not the business of women but of men to govern kingdoms, and so if he cherished any confidence in her he had better relinquish it. (10)

バッキンガム公は、王妃一族を嫌っていたので、王妃という名を聞くと、「王国を統治するのは男の仕事であって女の出る幕ではない。もし国王が母の信頼に頼るようなら、自分はもう手を引いた方がましである」と言い張った。イングランドには、ヘンリー一世の娘マチルダと甥のスティーヴンの王位争い以来、女性が国政に関与すると国が乱れるという概念があり、ヨーク家にはヘンリー六世の妃で、フランスの雌狼とあだ名されたマーガレット・オヴ・アンジューを相手に長い内戦を戦った苦い記憶も鮮明に残っていたから、「女性は国政に関与すべきでない」というバッキンガム公の言葉はそれなりの説得力を持っていた。また、すでに触れたように、エドワード四世は王妃の一族を有力貴族と

縁組させることによって求心力を強化しようとする政策を取った。この強引な縁組作戦の中でバッキンガム公は皇太后の妹を押し付けられて妻としていたが、彼女が低い身分であるがゆえにエドワード四世を恨んでいた。そこで、皇太后の名前を聞いて激しく反応したという事情も忘れてはならない。

国王とは言いながら弱冠 13 歳の少年である。しかも、家臣をすべて遠ざけられて、軟禁状態では、少年王はこの現状を受け入れる他はなかった。かくして若い王は「最終的には二人の公爵の意見を入れ、自らを叔父の下にゆだねることにした。二人の公爵は、非常に温和な物言いで話したが、それは嘆願というよりは要求であったので、受け入れざるを得なかったのである。このような経過を経て、国王は二人の公爵に伴われて、ノーザンプトンに行くことになった。そこでも「国王の家臣や､国王に謁見を求めた者は全員帰宅を命じられた。王妃の息子で国王の異父兄リチャード・グレイは逮捕されて、二人の公爵側に引き渡された」。(11) 以上がマンチーニの語る 4 月 30 日における事件のあらましである。

グレイ卿の逮捕についてはトマス・モアにかなり詳しいいきさつが書かれている。リチャードとバッキンガム公は、グレイ卿が兄のドーセット侯、叔父のリヴァース伯と腹を合わせて、国王と王国を支配しようと企て、身分ある者たちに諍いを起こして、名家を滅ぼそうと画策したと彼を糾弾した。

> Toward ye accoumplishinge whereof, they sayde that the Lorde Marques hadde entered into the Tower of London, and thence taken out the kinges Treasor, and sent menne to the sea. (12)

そして、その目的のために、「侯爵（ドーセット候トマス・グレイ）はロンドン塔に入って、そこから国王の財宝を持ち出し、兵士を海に送り出した」と二人は攻め立てた。兄のドーセット候はロンドン塔の長官であり、財宝を持ち出したのは事実であるが、兵を海に送ったのは叔父のエドワード・ウッドヴィルで、リチャード・グレイとは直接関係ない。しかし二人の公爵はウッドヴィ

ル一族がみな腹を合わせて陰謀をたくらんだと言って糾弾したのである。モアは、「これはロンドンで諮問会議の了承を得て行ったもので、そのことは二人も承知の上であったが、何らかの言い分が必要だったのである」(13) とドーセット侯を弁護している。国王は「兄の侯爵が何をやったかは知らないが、叔父のリヴァース伯とここにいる私の兄（グレイ卿）はそのようなことに関しては全く罪がないと保証する」と述べてグレイ卿をかばったが、バッキンガム公は「彼らは、陛下の全く知らないところでこのようなことをやってきたのです」(14) といって、ウッドヴィル一族がこぞって陰謀をたくらんだことを前提に、グレイ卿を国王の面前で逮捕した。なお、この時財務官のトマス・ヴォーガン、リチャード・ホート、それにエドワード五世の教育係ジョン・オルコックも一緒に逮捕されている。

年代記によってかなり記述に差はあるが、マンチーニとトマス・モアにはかなりの共通点が見られる。すなわち、「リヴァース伯の拘束はノーザンプトンで行われたこと、「リヴァース伯の拘束事件のニュースが国王の下に伝わらないように道路が二人の公爵の部下によって封鎖されたこと」、「グレイ卿の拘束が国王の面前でなされたこと」である。(15)

このように『続クローランド年代記』とほかの年代記に違いはあるものの、おおむねこのような経過で、リチャードとバッキンガム公は少年王のエドワード五世を、リヴァース伯等王妃一族から引き離して自らの保護下に置いた。

Ⅱ

リチャードはことの成り行きをただちにロンドンにいるヘイスティングズ卿に知らせた。一方、ウッドヴィル側からの早馬もロンドンに向かい、この報は30日の夜にはロンドンに着いた。この報を聞いて真っ先に行動を起こしたのは皇太后エリザベスであった。多くの年代記の中で、この様子を最も詳細に伝えているのはトマス・モアである。以下、モアの記述によってその動きを追ってみる。

With which tidinges ye quene in gret flight & heuines, bewailing her childes ruin, her frendes mischance, & her own infortune, damning the time that euer shee diswaded the gatheryng of power aboute the kinge, gate her selfe in all the haste possible with her yonger sonne and her doughters oute of the Palyce of westminster in whiche shee then laye, into the Sainctuarye, lodginge her selfe and her coumpanye there in the Abbottes place. (16)

この知らせを聞くと皇太后は、「子供の破滅、友人の災い、わが身の不運」を嘆き悲しんだ。そして彼女が、「兵を王の下に集めないように」と命じた時のことを呪った。これは戴冠式に出席のためにエドワード五世がロンドンに上洛する際に、その護衛の兵力をめぐって、ヘイスティングズ卿とウッドヴィル一族を支持する者たちの間で激しい論争があったときに、皇太后がヘイスティングズ卿の意見に妥協して、国王の護衛兵を少なくしたことを悔やんでいるのである。この部分は短い一節であるが、いかにエリザベスが動転し、呪ったり、罵ったり、失望、落胆していたかを生々しく伝えている。当時彼女たちが居住していたのはウエストミンスター宮殿であったが、この大混乱の中で、真夜中にもかかわらず、「年下の息子（ヨーク公・リチャード）と娘（エリザベス）をつれて、庇護所に入り、自身と一行は院長の宿舎におちついた。」ウエストミンスター寺院には聖域があって、そこに逃げ込めば何人たりとも手を出すことができなかった。彼女は 1470 年にも、現国王である長男のエドワードを妊娠中に、ウオーリック伯の攻撃を逃れてこのウエストミンスター寺院の庇護所に逃げ込んだことがあった。この時、彼女は庇護所でエドワードを出産したが、エドワードは庇護所で生まれたために「庇護所のエドワード」（Edward of Sanctuary）と呼ばれた。その時の経験から、彼女はとっさに聖域に身を隠すことにしたのである。

ウエストミンスター寺院に逃げ込んだエリザベス皇太后一行の下に、夜も明けきらぬうちにヨーク大司教トマス・ロザラムが駆け付けた。彼は、前夜ヘイスティングズ卿の使者から知らせを受けて、いち早くニュースを知ったのであ

る。大法官を兼ねていたヨーク大司教のもとへ、すでにこの時点でヘイスティングズ卿の使者が行っていることは、ヘイスティングズ卿がリチャードらと連携して政権の中枢である大法官を味方にしようとして動いたことを示している。しかし、ヨーク大司教は、ヘイスティングズ卿やリチャードの期待とは裏腹に玉璽を携えてウエストミンスターに急行した。この時、召使を全員武装させて大挙してウエストミンスターに駆け付けたことは、いざ内戦となった場合に大司教が皇太后側に立つ意志があったことを示している。

この時点で、ロンドンはさながら内戦前夜の状況を呈し、ウッドヴィル一族とヘイスティングズ卿が互いに兵を募った。『続クローランド年代記』を見てみよう。

> The following night, when rumour of this had reached London, Queen Elizabeth transferred herself with all her children into the sanctuary of Westminster. In the morning you might have seen the partisans of one side and of the other, some sincerely, others dissimulating because of the confusing events, taking this side or that. Some collected their associates and stood by at Westminster in the name of the queen, others at London under the protection of Lord Hastings. (17)

ここから、「うわさを聞いた皇太后はただちに子供たちを引き連れてウエストミンスターの庇護所に保護を求めた」のが 4 月 30 日の夜であることが分かる。翌朝、すなわち 5 月 1 日には、両派の共鳴者が、「事態が混沌としていたので、まじめな者もいたり、表面上だけ味方する者もいたが」、とにかくそれぞれの側についた。「ある者は親戚を集めて皇太后の名の下にウエストミンスターに集まり、ある者はヘイスティングズ卿の庇護の下にロンドンに集まった。」これらの記述から、混沌の中でロンドンはウッドヴィル派とリチャード派に二分されていたことが分かる。

一方、マンチーニはこの時の様子を次のように述べている。

WHEN this news was announced in London the unexpectedness of the event horrified every one. The queen and the marquess, who held the royal treasure, began collecting an army, to defend themselves, and to set free the young king from the clutches of the dukes. (18)

マンチーニも、この予期しないニュースがロンドンの人々を動転させたことに触れた後、「皇太后と、王室の財宝を掌握していた侯爵が、自らの護衛と二人の公爵から幼王を奪還するために軍隊を徴集し始めた」と述べている。

さて、この時の皇太后らの反応についてマンチーニは注目すべき記述をしている。

But when they had exhorted certain nobles who had come to the city, and others, to take up arms, they perceived that men's minds were not only irresolute, but altogether hostile to themselves. Some even said openly that it was more just and profitable that the youthful sovereign should be with his paternal uncle than with his maternal uncles and uterine brothers. Comprehending this, the queen and marquess withdrew to the place of refuge at Westminster Abbey standing close to the royal palace, and called by the English a sanctuary. (19)

これをみると、皇太后達が先ずやったことは、「ロンドンに来ていた貴族や、ほかの貴族たちに、武器を取って立ち上がるように説得する」ことであった。しかしその時彼らが知ったことは、「人々の心はただ揺れ動いているばかりでなく、彼らにまったく敵対している」という事実であった。なお、一部の者はあからさまに「幼王は、母方の叔父や異父兄弟といるよりは、父方の叔父といる方が理にかなっているし、有益である」とさえ直言した。このように、当てにしていた貴族たちを含めて多くの人々の冷たい反応を感じ取ったがゆえに、彼らは庇護所に身を潜めたことが分かる。その理由は、後見役は母方ではなく父方にまかせるべきだという昔ながらの伝統を尊重するものであった。貴族に

列せられているとはいえ、頼みのエドワード四世がいなくなってしまうともともと成り上がりのウッドヴィル一族に対する人々の視線は厳しかった。当初彼らは、それまで諮問会議を牛耳って思いのままに事を運んできたとの自信から、短期間に兵を集めることができると思っていた節がある。それは王弟で実力者のリチャードが都を離れた北部にこもっているとの前提の下でのことであった。しかし、そのリチャードが有力な公爵バッキンガムと連携して行動を起こし、ウッドヴィル一族の頼みの綱であるリヴァース伯を拘束したとなると、戦乱の時代を生き延びてきて、機を見るに敏な人々が次第にウッドヴィル一族を見限っていったのである。こうした事実に直面して、武力による対抗を諦めて、宮殿の目の前のウエストミンスターの庇護所に駆け込んだのである。

マンチーニの本を翻訳し、注を付けたアームストロングは、この部分を解説して「彼らは、リチャードによる国王拘束のニュースを聞いてから少なくとも一日は庇護所に逃げ込むことはなかった」(20) と主張している。庇護所に逃げ込むこと自体が敗北を意味するわけで、誰も敗者には味方をしない。当然ながら説得工作はウエストミンスター宮殿にいるうちになされたものであろう。彼らは 4 月 30 日の夕方に急を聞き、翌 5 月 1 日に有力者の説得にあたったが、見込みがないと判断して、その晩に庇護所に入った。これがアームストロングの解釈である。

皇太后の息子のドーセット候は当時ロンドン塔の長官であったが、当初は母親と一緒にウエストミンスター寺院に逃げ込んだが、やがてそこを出て反リチャードの活動を繰り広げることになる。また皇太后の弟のエドワード・ウッドヴィルは、海軍長官で 20 艘の船の指揮官であったが、彼も軍艦の集結をはかってリチャードに抵抗を続けることになる。このようなウッドヴィル一族のその後の行動からしても、彼らが真っ先にやったことは有力者の囲い込み工作であったろう。マンチーニ以外の年代記は、モアと同じように、皇太后一行がすぐに庇護所に逃げ込んだという考え方を支持しているが、ここはマンチーニの説が正しいように思われる。当初の混乱の中では、ウッドヴィル派とリチャード派に分かれていたものが、次第にリチャード側の支援者が増えていったので

皇太后も避難所に身の安全を委ねたと考える方が自然である。

これを裏付ける一つのエピソードを紹介しよう。ヨーク大司教トマス・ロザラムが、最初ヘイスティングズ卿からの使者を受けて、リチャード側から誘いを受けたにもかかわらず、召使をすべて武装させて、玉璽を持ってウエストミンスターに駆け付けたことはすでに述べた。ところがこの後まもなく彼は皇太后に密かに使いを出して、玉璽を取り戻しているのである。(21) これは、当初の混迷が晴れてリチャードの優位が明らかになり、ウッドヴィル一族が庇護所に籠ったのを見た大司教が、身の保全を考えて玉璽を密かに取り戻したものと考えられる。玉璽の保管は、国王の特命がない限り、何人たりとも、たとえ王妃といえどもその権利を持たないというのが建前であった。案の定、後にリチャードが実権を握ったときに真っ先にやり玉に挙げたのもこの点であった。

なお、玉璽を誰が保管していたかについては情報が混乱していたようである。というのは、5月2日、エドワード五世からカンタベリー大司教あてに手紙が出され、その中では「玉璽をしっかり保管して、ロンドンに着いたら持参するように」と命じられているからである。これは、この時点で、エドワード五世ないし、彼を保護下に置いたリチャードとバッキンガム公は、玉璽がカンタベリー大司教の下にあると考えていたことを示す。しかし、実際に玉璽がカンタベリー司教に渡されたのは、5月7日になってからで、エドワード四世の旧臣が、ヨーク公爵夫人シシリー（エドワード四世の母親）の邸宅に集合して、その場で玉璽その他の国王の所有物が、カンタベリー大司教トマス・バウチャーに引き渡されている。(22)　以上から、5月4日にリチャード等がロンドンに入って間もなく、玉璽はヨーク大司教の手から回収されて、保管され、7日に正式な引き渡しがなされたことが分かる。

皇太后一族が武力で対抗するという目論みははずれたが、一方、世論はすべてリチャードの味方であったわけでもなかった。

As there was current in the capital a sinister rumour that the duke had brought his nephew not under his care, but into his power, so as to gain for himself the crown,

the duke of Gloucester amidst these doings wrote to the council and to the head of the city, whom they call mayor. (23)

ロンドンには、「公爵は甥を自分の保護下に置いたのではなく、自らが王座に就くために自分の権力下に置いたのだ」というような悪意あるうわさも流れていた。このような事態を受けてリチャードは諮問会議とロンドン市長宛に2通の手紙を書き、自分は甥の英国王を、「拉致したのではなく、彼と王国を破滅から救ったのだ」と弁明したのである。そこには彼の国王に対する忠誠とともに、新国王の戴冠式が厳かに挙行されることも書いてあった。

After these letters had been read aloud in the council chamber and to the populace, all praised the duke of Gloucester for his dutifulness towards his nephews and for his intention to punish their enemies. (24)

この手紙は、「ロンドンの諮問会議場で大音声に読み上げられ、さらに市民の前でも読み上げられた。」すると「皆はリチャードの甥に対する忠節と、敵を誅した意図を称賛した。」

この様な形で事態を収拾したのがヘイスティングズ卿であったことは明らかである。彼はいち早くリチャードからリヴァース伯等の拘束の報を受け、親しい貴族や知人にリチャード支持を訴える一方、リチャードにも手紙を書いて、ロンドンにはリチャードが王位をねらっているとの悪意あるうわさも流れているということをリチャードに知らせた。これを受けたリチャードがロンドン市長のエドモンド・ショウと諮問会議宛に手紙を書き、自分は「甥を監禁したのではなく、国王と王国を救済したこと」、「国王に忠節であること」、上洛後「戴冠式は厳粛、盛大に行う」ことを改めて確認し、事態の収拾を図ったのである。

こうした説得工作が成功して、ロンドンはリチャードとバッキンガム公が、幼王を伴って上洛するのを受け入れる用意ができた。一方、ウッドヴィル一族は事実上武力によって、二人の公爵に対抗するという企てをあきらめざるを得

なくなった。しかし、マンチーニはこれに続く文章で、「しかし、彼の野心と欺瞞をよく知っている一部の人たちは、この企てがどうなるかについて常に疑いを持っていた」(25) とも述べ、リチャードに対する不信感が完全に払拭されていたわけではないことを示している。

Ⅲ

5 月 4 日、本来ならばエドワード五世の戴冠式が挙行されるはずであった日に、幼王を伴ったリチャードとバッキンガム公が家臣団を引き連れてロンドンに到着した。一行はロンドン郊外のホーンジィで、市長、参事会員の出迎えを受けた。彼らは真紅の衣装に身を包み、他におよそ 500 人の市民が紫の衣装に身を包んで出迎えた。一方、王の家臣と、リチャードおよびその家臣団は喪服を思わせる黒い衣装に身を包んでいた。(26) 人々が目を見張ったのは、行列を先導する 4 台の荷車であった。

> For ahead of the procession they sent four wagons loaded with weapons bearing the devices of the queen's brothers and sons, besides criers to make generally known throughout the crowded places by whatsoever way they passed, that the arms had been collected by the duke's enemies and stored at convenient spots outside the capital, so as to attack and slay the duke of Gloucester coming from the country. (27)

その荷車には、「皇太后の兄弟や息子たちの家紋や銘の入った武器」が積まれていた。さらに、触れ役が行く先々の人が集まっている場所で、「この武器は公爵の敵から奪った物や、ロンドン郊外のしかるべき場所に保管されていた物である。(彼らは) 所領から上洛するグロスター公を襲撃して殺害しようとしたのだ」と呼ばわって人々に知らせていた。

このような形でウッドヴィル一族の悪事を宣伝したために、市民はリチャードの幼王に対する忠誠を信じた。マンチーニは、市に入ってすぐ市長や参事会

員それに貴族たちは、こぞってリチャードに摂政就任を求めたと述べており、『大ロンドン年代記』にも次のような記述がある。

And thus was the kyng conveyed thorw the Cyte unto the Bysshppys palais
In paulys Chyrch yerd & there lodgid,
And the duke of Glowcestyr was lodged at Crosbyis place
In bysshoppysgate strete
And shortly aftyr was the said duke of
Glowcestyr proclamyd protectour of the Realm of England‥‥ (28)

ロンドンに入った国王とリチャードは宿泊地に向かった。王はシティを通ってセント・ポールの「ビショップス・パレス」に誘(いざな)われ、グロスターはビショップスゲイト・ストリートの「クロスビィ・プレイス」に宿を取った。注目すべきは、ここクロスビィ・プレイスで「間もなく摂政に就任した」と述べられていることである。しかしながら、リチャードは故エドワード四世によって摂政と定められてはいたが、諮問会議によって正式に任命するまでは摂政として行動することはなかったものと思われる。というのは、摂政就任については1422年と1454に先例があって、いずれも諮問会議の議を経ているからである。(29) この点に関してトマス・モアは、リチャードが新王に対して恭しくへりくだった様子であったので、最近までは世の聞こえが悪かったが、たちまち多くの人々から信を得ることができた。このため「次の諮問会議でただ一人選ばれて新王と王国の摂政にふさわしいものとされた」(30) と、諮問会議の議を経て摂政になったとしている。慣習法を重んじるイギリスのことゆえ、モアの言うように、形式的にせよ諮問会議の議を経て摂政についたと考えるのが自然であろう。

Ⅳ

摂政に就任したリチャードがまず行ったのは、大法官であるヨーク大司教を解任することであった。リチャードは、彼が前の諮問会議で主導的役割を果たしていたと考え、大法官の職をリンカン司教であったジョン・ラッセルに移譲させた。マンチーニは、この措置をリチャードがロンドンに入る前に行ったと書いているが、トマス・モアは諮問会議で更迭したと述べている。

> At whiche counsayle also the Archebishoppe of Yorke Chauncelloure of Englande, whiche hadde deliuered vppe the greate Seale to the quene, was thereof greatlye reproued, and the Seale taken from hym and deliuered to doctor Russell, bysshoppe of Lyncolne, a wyse manne & a good and of muche experyence, and one of the beste learned menne vndoubtedlye that Englande hadde in hys time. (31)

モアによれば、諮問会議でヨークの大司教は、「玉璽を皇太后に渡したことをこの場で激しく叱責され」、「彼から玉璽が取り上げられ」、賢明、善良、経験豊かで、当時のイングランドで最も学識ありとされる人物の一人である「リンカン司教ラッセル博士に渡された」と述べているが、玉璽自体が取り上げられたのではなく、大法官の職が剥奪され、リンカン司教ジョン・ラッセルに移譲されたと解すべきであろう。既に述べたとおり、この時点で玉璽は既にカンタベリー大司教の下にあったからである。諮問会議では、国王の印である玉璽を皇太后であろうとも第三者にゆだねたことが糾弾されたが、実際は混乱の中とはいえ、ウッドヴィル一族側にはせ参じたヨーク大司教を、リチャードが玉璽を理由に更迭したというのが真相であろう。もちろん、剥奪されたのは「大法官」の職であって、ヨーク大司教の職ではなかったが、彼はしばらくの間この罪ゆえにロンドン塔に収監されることとなった。

このあたりの事情は、年代記によって細かい点には多少の食い違いは見られるが、正式に摂政となったリチャードがウッドヴィル一派の締め出しに乗り出

したことを示している。

諮問会議では国王の住居が問題になった。ある者はセント・ジョン・ホスピタルを主張し、ある者はウエストミンスターを主張したが、バッキンガム公がロンドン塔を推薦し、これを全員が受け入れた。(32) 今日ではロンドン塔は監獄のイメージが強いが、当時は国王の居城としても使われており、ロンドンにおいては最も安全な場所でもあった。次に新王の戴冠式が聖ヨハネの誕生祭、すなわち6月24日 (33) に決定された。

戴冠式の日時の決定は大きな政治的な意味を持っていた。前例によれば、グロスター公ハンフリーはヘンリー五世の弟であったが、1422年、まだ1歳にもならなかったヘンリー六世の摂政に就任した。彼はヘンリー六世が成年を宣し、戴冠式を挙げた1437年まで摂政を務めた。ここから、摂政は新王の戴冠式までを任期とする前例が生まれた。ウッドヴィル一派が実権を握っていた時期に、リチャード抜きで拙速に戴冠式を挙行しようともくろんだのは、この前例を盾にして、エドワード四世の遺言によって摂政に指名されていたリチャードの権限を奪うためであった。

さて、戴冠式は6月22日に変更されたが、前例を踏襲すれば摂政としてリチャードが権力を行使できるのは5月10日から6月22日までの数週間しかないことになる。そこで、リチャードはこの前例によらず、摂政職を国王が成年に達するまで延長しようと考えた。この計画は、新たに大法官になったリンカン司教ジョン・ラッセルの議会開会式の演説草稿の中で明らかになる。ラッセルはこの演説で、学者らしくローマのマーカス・エミリアス・レピドウスが元老院から摂政位を与えられた前例をあげて演説した。この提案は議会の反ウッドヴィル派の人々によって強力に支援された。最後に、エドワード五世はラッセルに対してこの措置に同意すると回答した。(34)

5月10日の諮問会議では、リチャードの摂政の期間が問題になったが、先例のように新王の戴冠式までではなく、新王が成年に達するまでということに落ち着いた。これは新たに大法官になったにジョン・ラッセルの力によるところが大きかったことは言うまでもない。リチャードがラッセルを通じて、摂政

期間の延長を働き掛けたということは、自分の権力基盤を長期にわたって確保したいという野望のせいかもしれないが、裏を返せば、この時点でのリチャードに自分自身が王位につくという野望はなかったことになる。ラッセルは、大法官に就任することにはあまり乗り気ではなかった。(35) そのラッセルが智謀の限りを尽くして大演説を行ったのはリチャードを信頼していたからである。やがてリチャード自身が王位に野心を示すと、ラッセルのリチャードに対する信頼は完全に裏切られることになる。

ところで、ラッセルは『続クローランド年代記』の作者に擬せられている。この年代記は、いかなる恣意的な虚偽も、憎悪も、贔屓もないと明言しているにもかかわらず、リチャードを欺瞞と二枚舌の持ち主として敵意の対象としていることは明らかである。もし、ラッセルが『続クローランド年代記』の作者であれば、この時の裏切りが彼にリチャードに対する敵愾心を植えつけたと考えるのは当を得ていよう。

このようにしてリチャードの摂政としての身分が確定すると、国王大権に属する俸禄配分権と政府高官の任命権が事実上リチャードの掌握するところとなった。このような国事は、摂政の助言を得て国王の名のもとになされるのであるが、事実上、すべてがリチャードの意志で実行されたと考えてよい。その俸禄配分と高官人事で破格の厚遇を得たのはバッキンガム公ヘンリー・スタッフォードであった。エドワード四世の時代には不遇をかこっていたバッキンガム公であったが、5 月に入ると立て続けに恩賞を受ける。5 月 10 日、南・北ウエールズの終身首席裁判官、式部長官を拝命すると同時に、ウエールズ及び辺境地域の 53 の城の城主、執事、領主権、王家の家臣の監督、統治権を手に入れた。彼の権限は事実上ウエールズの太守に相当し、エドワード四世時代の初代ペンブローク伯ウィリアム・ハーバートを凌ぐものであった。その他にも、シュロップシャー、ヘレフォード、サマセット、ドーセット、ウィルトシャーの国王臣下の監督権と軍隊招集権、収入徴収権を与えられた。(36)

ほかに厚遇を得た者たちに、ハワード卿ジョン・ハワードがいる。彼は 14 日、トレント以南のランカスター公領の執事となった。一般には、ノーフォーク公

として知られるが、それはリチャードが国王になってから与えたもので、摂政たる権限ではこれ以上の厚遇はできなかったのである。ノーザンバーランド伯ヘンリー・パーシーは5月10日、スコットランド防衛の東部辺境司令長官に任命され、その10日後にはベリック・アポン・トゥイードの守備隊長に任命されている。その他に何人かのリチャードの腹心が抜擢されたが、その中にはウィリアム・ケイツビー等多くの北部人がいた。

注目すべきはヘイスティングズ卿の処遇であった。彼はエドワード四世の死後、反ウッドヴィルの急先鋒としてリチャードに味方してきたにもかかわらず、目立った恩賞は与えられなかった。彼は式部長官、カレー副総督というこれまでの地位にとどまった。遅ればせながら5月20日、造幣局長官に任命されたが、これもエドワード四世時代に保持していたものであった。(37) リチャードは一連の人事で、摂政就任に貢献した人々を重要な位置に配置し、自身の支配体制を確立した。しかし、まだ問題は残っていた。海軍長官エドワード・ウッドヴィルは艦隊を率いて逃亡していたからである。マンチーニは以下のように述べている。

> Thus with the authority of the council he denounced the commander of the navy, Edward, as an enemy of the state if he did not disband his fleet. The duke of Gloucester appointed a period of grace to allow for the return or desertion of officers of the soldiers and masters of the ships, who were under Edward's command. (38)

リチャードは諮問会議の承認を得たうえで、艦隊司令長官エドワード・ウッドヴィルを非難し、「もし艦隊を解散しないならば国家の敵である」と糾弾した。具体的には、一定の猶予期間を設けて、エドワード・ウッドヴィル麾下の士官、船長の復帰、脱艦を許したのである。一方で、エドワードをとらえた者には、生死にかかわらず特別に褒賞を与えると約束した。この後にも、矢継ぎ早にエドワードの艦隊の解散をせまる措置をとったので、多くの船長がリチャードの命令に従った。(39) マンチーニは、「艦隊の中にひときわ大きいジェノアの商

人から期限付きで貸し出された戦闘用の船があった」が、「この船の船長がまず命令に従ったので、多くの船がそれに倣った」(40) とその様子を細かに述べている。結局、エドワードの命令に従ったのは 2 隻のみで、この船はエドワードとともにフランスのブルターニュに逃亡した。

もう一つの大きな問題は、リチャード等が身柄を確保しているリヴァース伯等の処分であった。諮問会議に対してリチャードは、リヴァース伯等が、彼を待ち伏せして暗殺を謀ったのは反逆罪に当たるとして告発したが、諮問会議はこれを拒否した。「待ち伏せは未遂であったうえに、その時点でリチャードは摂政ではなかったし、いかなる役職にも就いていなかったので「反逆罪」は成立しない」というのが諮問会議の結論であった。これは、摂政になったとはいえ、諮問会議の中には反リチャードの勢力もかなりいたことを示すものである。彼らは、リチャードが摂政として国王の権限を代行することは認めるが、リヴァース伯等の陰謀事件は国王の代理人に対してなされたものではなく、リチャード個人に対するものであるとの理屈で、リチャードの力が強くなりすぎることを牽制したのであった。

リチャードが、バッキンガム公、ハワード卿など自分の息のかかった有力者を通じて諮問会議の中で勢力を拡大すると、これに反発する者たちも結束を固め始めた。5 月下旬になると、はっきりと二つのグループに分かれていった。「6 月 5 日の会議では、リチャード派のバッキンガム公、ハワード卿などはクロビィ邸（6 月 4 日まではベイナード城）、反リチャード派・エドワード五世忠誠派（ヘイスティングズ卿、ロザラム、モートン等）はウエストミンスターに集まり、国王戴冠式や恒例の国家統治業務を話し合った。」(41)

グロスター公リチャードは、ウッドヴィル一族によるクーデターをヘイスティングズ卿とバッキンガム公の手を借りて阻止し、兄エドワード四世の遺言どおりに摂政に就任した。最大の敵であったウッドヴィル一族が、庇護所に逃げ込んで当面の敵はいなくなった。しかし、摂政となって事実上俸禄配分権を握ったリチャードが、自らの味方や配下を厚遇したために、ここからはずれたヘイスティングズ卿などエドワード四世の旧臣グループと、リチャードを中心

とした新興勢力との間に亀裂がますます深まっていった。以上が６月８日までの経緯である。

Notes

（1）尾野比左夫、『リチャード三世研究』、渓水社、1999、P.118, Cf. Pollard, A. J., *Richard III and the Princes in the Tower*, Alan Sutton Publishing Limited, 1991, pp.91-2

（2）3）Mancini, Dominic, *The Usurpation of Richard III*, Translated and with an Introduction by Armstrong, C. A. J., Alan Sutton, 1989, p.77

（3）op. cit., Pollard, A. J., p. 92, op. cit., 尾野比左夫、p.118, Horrox, Rosemary, *Richard III: A Study in Service,* Cambridge University Press, 1989, p.97

（4）*The Crowland Chronicles Continuations : 1459-1486*, By Pronay, Nicholas, and Cox, John, Richard Ⅲ and Yorkist History Trust,1986, pp.156-7

（5）ibid., p.157

（6）op. cit., Mancini, pp.75-7

（7）ibid., p.77

（8）ibid., p.77

（9）ibid., p.77

（10）ibid., p.77-9

（11）ibid., p.79

（12）Sylvester, Richard S., *The Complete Works of St. Thomas More, Volume 2*, Yale University Press, 1963, p.19

（13）ibid., p.19

（14）ibid., p.19

（15）Cf. op. cit., Mancini, p.116, Notes 46 by Armstrong, C. A. J.

（16）op. cit., Sylvester, pp.20-1

（17）op. cit., *The Crowland Chronicles Continuations*, p.157

（18）op. cit., Dominic Mancini, p.79

(19) ibid., p.79

(20) ibid., p.117

(21) op. cit., Sylvester, pp.22-3

(22) op. cit., Mancini, p.119

(23) ibid., p.81

(24) ibid., p.83

(25) ibid., p.83

(26) *The Great Chronicle of London*, ed. by Thomas, A. H., and Thornley, I. D., Alan Sutton, 1983, p.230

(27) op. cit., Mancini, p.83

(28) op. cit., *The Great Chronicle of London*, p.230

(29) op. cit., Mancini, pp.120-1

(30) op. cit., Sylvester, p.24

(31) ibid., p.25

(32) op. cit., *The Crowland Chronicles Continuations*, p.157

(33) この日の会議で一旦 24 日に設定されたが後に 22 日に変更された。

(34) Ross, Charles, *Richard III*, University of California Press, 1981, p.75, op., cit., 尾野比左夫、p.121

(35) ibid., p.79, notes 51

(36) ibid., p.77, op. cit., 尾野比左夫、p.122

(37) ibid., p.78, op. cit., 尾野比左夫、p.123

(38) op. cit., Mancini, p.85

(39) ibid., p.122

(40) ibid., p.87-9

(41) op. cit., 尾野比左夫、p.124